

東京大学総長や文部大臣などを歴任し、公立大学法人静岡文化芸術大学の経営に長年お務めいただいた有馬朗人先生が、令和2年12月6日御逝去されました。

謹んでお悔やみ申し上げますとともに、心より御冥福をお祈りいたします。

有馬先生は本県との御縁も深く、少年時代を浜松で過ごされ、「やまいか精神」を生んだ浜松の地をこよなく愛しておられました。

原子物理学の権威として、本県の原子力発電所の安全確保などに深くかかわっていただいたほか、

俳人としても平成24年度から5年間、「富士山歳時記」の選考委員会の委員長を務めていただきました。

平成22年4月からは、上記公立大学法人の理事長を務められ、

本県の学術振興にも多大なる御尽力をいただきました。

県民の教育や文化力の発展に寄与された有馬先生の志を引き継ぎ、これからも教養あふれる“ふじのくに”の人づくりを推進してまいります。



あり ま あき と
有馬 朗人氏

公立大学法人 静岡文化芸術大学理事長

有馬 朗人氏と“ふじのくに”静岡県

令和2年4月7日

静岡文化芸術大学創立20周年 特別鼎談

有馬朗人理事長、横山俊夫学長、川勝知事による鼎談。

脈々と受け継がれる大学創設時の理念から、日本の大学の在り方、未来のビジョンについて語り合った。

※「ふじのくに」第41号に掲載



静岡文化芸術大学の入学式で、式辞を述べる有馬氏。学生に対し真っ直ぐな言葉を贈られた(平成31年4月)。



文化芸術体験演習(俳句)での語り口は穏やかで学生への愛に満ちていた(平成28年6月)。



選考委員会の様子

平成24年度から5年間、「富士山歳時記」を編集。募集した富士山の俳句の選考委員会委員長を務められた。



「富士山歳時記」巻一～巻五。お題は、春の富士山(巻一)～冬の富士山(巻四)、新年の富士山(巻五)。

追悼

有馬朗人先生は茶目つたつぷりの人。いたずらに興じた少年の頃を思い出される時は相好を崩され、わらべのお顔でした。じつは今、先生はカクレンボウの最中で、そのうちワッハッハと大笑いして皆を驚かされる……ふと、そう想ってしまいます。師走7日の東京からの訃報は、誰ひとり予期せぬことでした。数日前まで、晴雨を問わず日々数千歩の散歩をされ、2年前の新聞社のインタビューでは、2050年まで生きると語っておられましたから。

先生は2010年、公立大学法人となった静岡文化芸術大学の初代理事長に就かれました。私はその6年後に着任しましたが、毎週半ばには、ほぼ必ず先生のお姿があり、法人経営の課題をテキパキとこなしておられました。その頃、先生は、国公立大学への国や県の交付金が年々定率で削られることにつき、世界各国の教育予算と比べて大いに嘆かれ、霞ヶ関に幾度も苦言を呈されたものです。近年この政策が変わりだしたのは先生のお力があってのことでしょう。

先生は新入生への俳句授業にも力を注がれました。毎年300余名を数クラスにわけ、古今東西の詩のなかで、日本の詩は多く自然を詠い、短詩に優れるとして、俳句の大切さを語られました。遠隔講義となった今年は、全員に3句の自作を課され、各人提出の内から1句を選び、添削して返されました。留学生にも好評でした。

先生は2017年頃から、さらに多様な留学生を迎えるための大学院改革と、学生やゲストや教職員が宿泊滞在し、ゆとりをもって対話する学寮を開く夢を熱く語られるようになりました。各国の大学での共同研究や、日本の教育行政での総合学習推進のご経験がその背景にありました。

先生はまた、浜松出身の賀茂真淵の国学にも心を寄せられ、真淵は「江戸に移ってしまった」と惜しまれるご様子でした。昨秋、本学の将来構想検討委員会が先生の諮問に答え、学寮と研究センターを一体にした新組織「遠州学林」の実現にむけて中間答申を呈しました。先生は一読され、「真淵がこれを読めば浜松に戻ってきますよ」と喜ばれたのが印象に残ります。最近のご研究は、真淵の弟子のひとり、建部綾足の片歌をめぐるものでした。古事記や日本書紀に残る五七七や五七五の歌こそ「俳句の祖先」と確信しはじめた、と昨年正月、俳誌「天為」に書いておられます。先生の「くにまなび」が途切れなければ、ハイクは人類の無形文化遺産、とユネスコが合点するための大きな後押しになったのでは……つい、そう考えてしまいます。



静岡文化芸術大学学長
横山 俊夫



静岡文化芸術大学創立20周年を記念して、同窓会から贈られた新調校旗を手にする有馬先生(右)と横山学長(左)。



賀茂真淵記念館歌碑

俳人・有馬朗人先生揮毫「ふるき百千の 國つ文 正しく深く ときあかし とぞせる雲を ひらきたる すくれしわざを たたへばや」(昭和11年 静岡県郷土唱歌)